

令和5年12月1日
農業技術センター技術普及部

標 題	水稻新品種「つきあかり」の普及拡大に向けてみんなで取り組み中！
-----	---------------------------------

(ダイジェスト)

持続可能な米づくりに向けて普及拡大が進む期待の新品種「つきあかり」について、県内各地において展示ほを活用した栽培技術の確立や普及の活動を展開中です。



「つきあかり」は、約20年にわたり本県の奨励品種として栽培されてきた「ハナエチゼン」の代替品種として、令和4年2月に島根県農産物種子等生產品種に採用されました。

近年、日本では中食・外食向けの業務用米需要（手頃な価格で大量に安定供給される米を重視）が伸びており、本県では「島根県多収穫米推進協議会（事務局：農山漁村振興課）」が核となり、生産コストの削減にも繋がる多収穫品種の導入が検討されてきました。一方で、極早生品種「ハナエチゼン」は、実需からの需要が低迷しており、作付面積が減少傾向でした。こうした中、試験研究部門による品種比較試験、実需者による食味試験、そして普及組織による現地適応性の評価等が重ねられ、良食味多収品種として「つきあかり」が選定されています。

普及組織では本年県内13カ所に展示ほを設置し、担当生産者への技術支援や生産拡大に向けた現地研修会、また生育調査による栽培マニュアルの検証等を行いました。

各地では、4月19日から田植えが始まりました。本田期間中には、田植え時の低温や強風による植傷みやその後の日照不足により分けつの発生が緩慢となり、また幼穂形成期から出穂期にかけての日照不足が籾の分化や発達に影響する等、気象条件が非常に厳しいもので、全般的に穂数や1穂籾数が少なく、その結果全籾数が不足しました。

こうした中、導入が進む平坦部の早植え（標高100m以下で5月上旬までの田植え）ほ場では、収量目標（坪刈り630kg/10a）達成者率者が50%に止まりました。一方で、成熟期は8月中旬となり「コシヒカリ」や「つや姫」との収穫作業の分散に繋がることが確認され、前年目立ったこの時期の倒伏も軽度でした。また、生産者からは「『つきあかり』が一番良かった（ほ場収量639kg/10a、農産物検査1等）」との評価もありました。さらに、それらの結果を踏まえて売上額を算出したところ、優位性も確認できました（表1）。

表1 令和5年作における売上額の比較

品種	収量 kg/10a	売上額 円/10a	備考
つきあかり	610	110,817	坪刈収量
	554	100,643	ほ場収量暫定値
比) コシヒカリ	480	92,800	ほ場収量推定値

注) 売上額はJASしあね概算金(2等)により算出
「つきあかり」の収量は平坦部早植えほ場の平均値

「つきあかり」の面積は本年約100haであり、来年は300haを目標に更なる拡大が見込まれ、導入期から成長期へと移行しつつあります。

技術普及部では、本年見られた初期生育の不良や、この直接的な改善、またこれを補う穂肥の施用等の技術に目処をたて、平坦部での安定栽培技術の普及を図ります。さらに、これまで事例の少ない中山間や山間部での導入を目指します。